

昨年末の第六十回全国高校駅伝男子の部に、室蘭大谷高校が五年ぶり十六回目の出場を果たし、本番の数日前に竹本将人校長先生をはじめ選手団の本山参拝があつて、私も同行しました。大谷派を代表して教育担当の江尻参務の激励や記念品贈呈等があつた後、工藤監督や後藤主将をはじめ選手一人ひとりが決意や思いを述べるのを聞いていて、ある共通点に気づきました。それは、それぞれがそれぞれに親や監督コーチや先輩や仲間や友人などの存在の大きさを語り、また当日のその参拝式にもふれながら、理解して応援してもらっていることへの感謝やお礼の言葉を、自分なりの言葉で語るのです。私は、それが彼らが北海道での予選を勝ち抜いてきた意欲やパワーの源泉になつていると感じました。

今年も冬季オリピックやパラリンピックが開催され、日本人選手も活躍していますが、そのインタビューなどで一流の選手たちが共通して語るのは、「○○のおかげで」と、家族や監督コーチなど、また自然や天候や応援している人たちに對してまで感謝の意を述べ、その応援が力となつていっているという旨のことです。自分に多くの願いがかけられているのを、压力と感じて否定的に捉えるのではなく、その有り難さの実感をもつと、それは意欲や力になります。感謝の視点が、出会っている現実の意味や価値を与えてくれます。価値が見つかなければ、苦手意識や逃避意識が出てきます。

私たちが今取り組んでいることについて、勿論直接的には自分自身の意欲や努力の積み重ねが成果を生み出していくのですが、その営みのすべては、誰か何かに支えられて成り立っています。生まれて（本当は生まれる前から）今日までの私の人生は、さまざまな出会いと支援によって成り立っています。それらのうちの、どの一つが欠けても違った結果になつていくに違いありません。現前の一切が、さまざまな無限の不思議なはたらきによって成り立っています。そのすべてが現在に意味を与え、また同時に現在の喜びが、支えた過去の一切に意味を与えます。そこに目が向くかどうかです。

私たちの先輩方は、仏様からの願いや応援に安心して、思い通りにならない現実を大切に受けとめて、そこからさまざまに学び、人生の糧にしてきました。その願いの受け止めと感謝と意欲を「念仏」を称える形で確かめていったのです。

いつもそこにある有り難さに気づいていこうとする、その視線の方向性が大事なのです。そうしている人と、人がやってくれた些細なことに気づきます。有難いと思ひ感謝の気持ち湧きます。うまくいって当然ではないのだと言うところに立脚し、自分の今の状況を恵まれていて有難いと感じる人は、うまくいったことが大きな喜びや手応えになります。さまざまなことに対して、「お金を払っているので、お礼を言う必要はない」と言い、いつもある状況を「当たり前」と感じると、喜びを得損ねてしまいます。不足と不満ばかりになつて、「当たり前」のレベルがどんどん上がつてしまい、何を食べても、何を手に入れても、何ができるようになつても、そこには喜びも感謝もありません。そうすると、現在の自分のところでの力や意欲が湧き上がることもありません。

手に入れたものと同じでも、それを当たり前と思うか、まだ足りないと思うのか、あるいは有難いと感じるのかによって、大切なことへの気づきは全く異なつてしまいます。つまり、目の前の状況から多くのことを学び成長する、その力は「有難い」という感謝から起こってくるのでしょうか。私が人間に生まれ、さらに、この私として生まれたのは、奇跡のようなことです。誕生日は、「いのちをありがとう。育ててくれてありがとう」と言うべき日でしょう。私が、今現に生きています。生かされている。目の前の環境の中において、勉強なり、クラブ活動なり、趣味のことなり、友だちとの語り合いができていっているという事は、決して当たり前ではありません。呼吸ができる。食事ができる。住む家がある。語り合える友がいる。応援してくれている親や先生がいる。どんなに恵まれた有難いことであるのか。きちんとしてらえて、そこに安心して、自己ベストを尽くしましょう。